談話会報告

本年度の研究談話会は新任教官・退任教官の方々から3回にわたって話題を提供していただいた。

第一回談話会（7月11日）

テーマ：欧米マルクス学派の現代資本主義分析

——労働市場の分断化と経済危機——

磯　谷　明　徳

1970年代以降の欧米におけるマルクス理論の興隆はしばしばマルクス・ルネサンスと呼ばれる。このマルクス理論の再生の運動を要請する契機をなしたのは，60年代後半を境とする先進資本主義諸国における経済危機（スタグフレーション）の発生と労働運動の再活生化である。マルクス・ルネサンスは数多くの論争に彩られている。経済学の領域に限るならば，我々は2つの大きな論争を経験している。1つが転化論争であり，他の1つが利潤率低下論争である。報告では，後者に対象を限定して幾つかの議論を紹介した。

さて，後者の論争の経過の中から生み落とされたコンフリクト理論は，経済危機に対して新たな接近方法を定礎すると同時に，欧米マルクス学派の独自な理論的貢献をなす。

それはまずB・ローソン等によって70年代以降のインフレ加速化の説明に採用された。インフレの加速化は，各階級のアスピレーションが相容れず，所得に対して対立し合う諸要求が利用可能な所得を上回る結果として生ずる，即ち，その根本的規定因は国民生産物の分配ををめぐるコンクリフトにあることが明らかにされた。次いで，分配をめぐるコンクリフトの分析から生産過程内部，特に労働過程におけるそれとしてその分析の地平を拡張することによって，インフレの加速化を分配過程のみならず労働過程におけるコンクリフトの総結果として把握するという新展開を試みるのがアメリカ・マルクス学派（Radicals）である。

ラディカル派の分析は，更に(1)Productivity Puzzle（低生産性問題）の解明，(2)スタグフレーション分析に対する新たな含意の提出へと進む。これらの分析を基礎づけるのは，H・ブレイヴァマン以来の労働過程における資本による労働の統制のために生産・労働組織がいかに位階的に編成されているかということへの理論的関心とそうした階層化の再生産する基盤としての労働市場の分断化の検出である。即ち，戦後アメリカ経済における「協調」諸関係を維持するために講じられた全ゆる諸手段が，(1)失業コストの低下，(2)労働市場の分断化という2経路を介して，産業予備軍に本来備わっていた経済的機能の低下をもたらした，ここにインフレの加速化と失業率の上昇とが同時に進行する事態としてのスタグフレーションのラディカル派による分析の核心がある。

しかし，ラディカル派は現在の経済危機を経済システムの問題に局限するのではなく，資本主義

のルールと自由民主義のルールの重なり合った現代資本主義の危機として把握する。スタグフレーションは，現代資本主義における社会統合の危機，彼らの用語でいえば「自由民主資本主義の危機」に起因するものなのである。こうした理解が正しいとすれば，現在の経済危機を過去の経済不況のアナロジーとみなすことが如何に皮相的であるかもまた明らかであろう。

文　献

1）Bowles, S., Gordon, D.M. and T.E. Weisskopf, *Beyond the Waste Land*, Doubleday Books, 1983.
2）Gordon, D.M., Edwards, R. and M. Reich, *Segmented Work, Divided Workers*, Cambridge Univ. Pr , 1982.
3）S. ボールズ「米国経済の破綻回避策を提唱する―ラディカル派からの『民主的対案』―」『エコノミスト』1984年9月11日号。

第二回談話会（10月24日）

テーマ：新しい英語教育学

田　中　茂　範

最近，応用言語学分野内で，外国語学習を実証的に研究し，その知見に基づいて外国語学習理論を構築しようという動きがみられる。従来，外国語教育はその理論的根拠を心理学，言語学，教育学といった関連分野に求めてきたが，「外国語学習はどのようにおこなわれる」のかといった問題に真正面から取り組む試みはみられなかった。「外国語学習」の正しい認識をもたないまま関連領域に依存した外国語指導の実践をおこなってきた結果として，外国語教育は，いやおう無しに言語学や心理学の分野の動向にふりまわされてきた。その反省として，実証データを重視する外国語学習研究（SLA）分野が生まれたといえる。この報告では，以下の点について概略をのべた。

SLA分野の守備範囲は大きいが，一言でいえば，与えられたデータを基にして学習者が作りだす言語体系（中間言語と呼ぶ）の発達・使用に働きかける変数を明らかにし，外国語学習そのものを理解することを，その主たる研究目的とする。やや詳しくいえば，外国語の発達過程の言語的記述，(2)学習者の用いる認知ストラテジー及び(3)言語発達及びその使用に影響を与える認知・情意因子の研究がその射程距離にはいる。SLA研究の方法としては，対照分析，誤答分析に加え因子分析が主として用いられデータの収集は横断法と縦断法の2つのやり方を相補的に用いる。

SLA研究の歴史は比較的浅いが，ここ15年の大変活発な調査を通して上記の3領域にかなりの光があてられた。領域の(1)においては，モニター理論，文化変容理論，創造的建設理論などが提唱れ，(2)では，既存の知識のフル活用，規則化の発見，言語体制の単純化など普遍的な認知ストラテジーが学習者によって用いられることが明らかになり，そして(3)では，特に不安，自我浸透性，言語ショックなどといった情意因子がいかなる条件の下で強力に作用するか，といった問題が明らかにされ

てきている。

SLAの研究成果は，教授法の評価基準や指導モデルの提案といった形で積極的に応用されてきおり，我国の英語教育においても，英語学習理論に基づいた英語教授の実践がおこなわれる方向に向かい始めている。

テーマ：社会的影響過程の実証的研究

——説得的コミュニケーションによる態度変化を中心に——

上　野　徳　美

研究談話会では，著者がこれまで行ってきた社会的影響過程の研究，特に，説得的コミュニケーションによる態度変化の実験的研究を中心にその概要を発表した。この問題は，社会心理学の主要なテーマの１つである。発表の内容の要約は次の通り。

1. 社会的影響過程とは
2. 説得による態度変化の実験的研究
   (1) 説得のモデル。
   (2) 本研究のアプローチ
3. これまでの研究の概要（研究の具体的紹介）
4. 今後の研究について
5. 最近の態度と説得に関する研究
6. その他（集団分極化現象の研究）

社会的影響過程とは，個人ないし集団が他者ないし集団に影響を与える過程および与えられる過程，さらに両者（例．個人⇄個人）の間に影響の相互作用が生起している過程をいい，その具体的な事象として，説得，同調への圧力，他者の存在などによる反応の過程をあげることができる。

筆者は，これまで主に説得への抵抗の現象に関心を持ち，従来研究の進んでいなかった状況の要因（特に，予告の効果）を抑制効果という観点から検討するとともに，説得への抵抗の心理的メカニズムについて探ってきた。その結果，予告のタイプ，予告からのメッセージまでの時間間隔，話題の自我関与度，受け手の性などの要因が，予告効果の重要な規定因であることを見いだした。また，予告のひき起こす抑制効果のメカニズムとして，心理的リアクタンスや認知的反応（主に反論）の生起することが明らかになった。

さらに，心理的リアクタンス理論（Brehm，1966；Brehm & Brehm，1981）を１つの手がかりにして，説得への抵抗にみられる心理的メカニズムを究明した結果，説得の圧力→態度の自由への脅威の知覚→心理的リアクタンスの喚起→送り手やメッセージ内容の評価の低減→説得への抵抗，というプロセスの働くことが示され，心理的リアクタンス理論の基本命題に問題のあることを指摘した。

最後に，今後の研究方向と最近の研究の動向について触れた。

第三回談話会（11月28日）

テーマ：大野一郎氏：「思出片々」
大山　東氏：「スキー技術の変遷」

60年３月定年退官される大野・大山両教授のお話を伺った。

大野教授は「思い出片々」として満州での放送局のお仕事，敗戦時の悲惨な体験，朝鮮を経て日本に引揚げられる迄の辛酸を語られた。ソ連参戦の布告を知って絶望して一家心中を遂げた同僚一家，病気のわが子を殺して発狂した避難民の母親，鴨緑江を渡って収容所に入れられた後のソ連兵との交流，スターリンの文盲撲滅運動の成功，中共軍の厳正なる軍規，若き中国兵の希望に満ちた眼の輝き，憲兵の来る迄のソ連兵の略奪，等々について語られ，鴨緑江を渡る時河に落ちて朝鮮兵に銃殺されたが幸いに助かった事を思えば，その後の大抵の苦労は我慢出来るようになり，人は禍を転じて福となすことが出来るのだと結ばれた。

大山教授は「スキー技術の変遷」と題され，学生の時に始められて現在迄続けられているスキーの経験とその技術の変遷について語られた。学生の頃はレインコートに野球帽，軍手を重ねてという出で立ちであった。兵役は山砲隊で兵隊靴で軍隊スキーを。25年に本学に赴任され，学生とスキーを始められた頃はスキーが一台しかなく，学校の近くの坂で順番に滑った事，福島大のスキーを借りて五色温泉で合宿したが先生と学生が同じレベルであった事，以後文部省の指導者養成の研修会に連続参加して技術を磨き，年はとっても，体力に於てまさる若い学生を自信をもって指導出来るものとしてスキー技術の研鑽に務められたこと，日本のスキーがフランス・スキーからオーストリー・スキーに変れば直ちに新しいスキーを研究され，研修会の講師として教える方に時間をとられて自分で自由に滑る事が難しくなっは今も，夜明け前に起き出して滑ること，基本スキーの技術及びその指導の研究に意欲を燃やしておられること等々を語られた。

お二人のお話により30数年の本学での勤務を全うされようとしている両教授の人生の一端を垣間見ることが出来た。死線をさまよった経験を軽快なユーモアに包み，その経験を肥やしにした人生観を語られる大野教授，年はとっても若いものに負けぬだけの技術を磨き続けられ，尺八，書道の趣味も円熟の域に達しておられる大山教授，このお二人の滋味溢れるお話を事務の方々共にうかがう事が出来たことは幸いであった。　（川村記）